（様式第８号）

事業報告書（平成２９年度）

事業名　ミュージカル「つながるねがい京山編」

団体名　劇団公民館京山　　担当者名　鴨井　典栄

※活動の様子がわかる写真（データもお願いします）と説明を必ず添付してください。

１．活動内容（日時、場所、参加対象者、人数、内容等）

日　　時	平成３０年１月２８日(日)　１４：００～
場　　所	京山公民館
参加対象者	劇団員（小学４年生から社会人） 観客(地域住民、学生ほか)
人　　数	８５人
内　　容	京山地区ESDフェスティバルは今回で１３回目になる。劇団公民館京山は、第４回から参加させてもらって、今回で第１１回目の公演になる。当劇団は毎回、オリジナル演劇を制作して上演している。 今回は、岡山と関連深い鶴を題材にした作品を制作する予定で進めていた。その制作過程のなかで、岡山と鶴とが関連する施設の一つとして、後楽園に着目することとなった。そのなかで、後楽園の築庭の発起人となる岡山藩主、池田綱政を主人公とした。それは、父である池田光政との親子間の愛情と世襲による葛藤の関係、さらに、光政と綱政の親子二代に渡って使えた津田永忠との関係が、「まいしるべ」のテーマである「想い合い、行動すること＝舞うことで、自ら道しるべを切り開いていくこと」と合致したため採用した。 練習は、平日の夜や土日を中心に、週１回程度行い、本番が近づくと週５回集まることもあった。

（様式第８号）

２．ESDの視点を取り入れたところ、ESDの視点で見直したところ
舞台設定を後楽園にしたところで、その歴史をあらためて見直してみた。実際、制作作業を行っていくうえで、後楽園について何も知らないことに気付き、後楽園に行ってみたり、図書館他で調べたりした。そのなかで、現代に生きる人たちに知ってもらい後世に残したいものが、池田光政とその息子綱政、及び両方に使えた津田永忠の関係にあると考え、台本を最初から作り直すことにした。そうして、地域の歴史的価値で見直してみた結果、「まいしるべ」という鶴をモチーフにした物語に、親子の葛藤というエッセンスを加えた演劇を創り上げた。 家族、学校、会社等は生活の中で欠かせないコミュニティだが、それ以外に活動の場やネットワークを作ることが個人個人の成長に繋がると考え、「公民館」という地域のコミュニティをもっと活用することにした。今回は、公民館を通じて知り合った「津島八朔踊り」や「伊島詩吟クラブ」の方にもご出演いただき、舞台の時代設定である江戸時代における地域との歴史的つながりを地域における持続させたい価値ある取組の一つとして演劇に取り入れた。演劇という手法により、舞台という共通の目標に向かい、役者や裏方等の役割担う中で、人と人が面と向かいともに活動し、自分と向き合う中で自分自身のやりたいことを活用し、五感を通じて思いを伝え、受け取る体験を提供する。

３．取組の成果（参加者にどのような意識や行動の教育上の成果があったか。感想など）
お互いに意見を出し合いながら、全員で一つの作品を創ることによって、「ひとりはみんなのため、みんなはひとりのため」という意識で行動することが出来るようになった。 それと共に、お互いの個性を尊重する気持ちを持てるようになり、一つの作品が出来上がった。 今回の役割分担の中で、新しい団員にダンス指導をするという立場に初めてなった団員からは、人に指導する中で、自分自身と向き合い、成長することができたという成果が得られた 本番までの練習時間がまとまってとれない中で、各々の役割を当日にしっかり把握し、互いにたすけあえたことが、今回の作品の完成度を皆で上げた形で、本番の観客の皆様に届く上演の一因であった 観客の方からの感想として 岡山の歴史と文化を知る良い機会になりました ミュージカル風のアレンジもされてとても楽しく拝見しました 俳優さんが素敵で、歴史上人物イメージと合っていた 狭い会場が残念、もっと地域で上演してほしい それを出演者で共有し、劇団としてこだわった映像と音楽、観客に伝えるための工夫の効果を実感することができました。団員自身がこの踊りを作品を作るのは本当に大変だったけども逃げずにやり遂げられた、それによってこの作品が終わってしまうのをさびしく思うという感想が得られたことは、劇団が目指していた一つの成果だと思う。 また、作品のテーマでもある、自分自身を見つめ行動し、皆と共に成し遂げていく様を、芸術性の高い一つの演劇作品として、観客の若者（子供）を呼び地域の人たちの心に届け

（様式第８号）

られた。

４．今後の課題と展望

今回は、途中で脚本のやり直しとまではいかなかったが、大幅な修正を加えることとなった。その為、資料集めや現地調査ほかなどの工程が追加になり、脚本作製に時間を要することとなった。その為、台本創りにおいて、みんなで顔を合わせて意見を聞きながら創り込んでいくという本来の作業が遅れ気味になった。その結果、背景などの大道具や照明、音響などの詰めの作業に影響が出た。

このことについては劇団員の人数不足という側面もある。脚本づくりが順調に進んだとしても、今回の人数では出来ることに限界がある。今後は、この活動をもっと積極的に、外に向かってアピールし、共感してもらえる若者などを募集していきたい。

今後、このような劇団を県内に幾つか設立することを目指していく。